

自由集会

8 月 26 日（金） 14:50～16:50

ルーム D

F1

ワークショップ「知られざる食肉目動物の世界～東欧と日本」

○増田 隆一（北海道大学大学院理学研究院生物科学部門）

ルーム E

F2

ニホンジカ研究と管理のこれまでとこれから

○飯島 勇人¹，鈴木 牧²，宇野 裕之³，梶 光一³（¹森林総研，²東大院・新領域，³東京農工大）

ルーム F

F3

イノシシの豚熱（CSF）感染拡大と生息密度の変動をいかに把握するか？

○横山 真弓¹，鈴木 正嗣²（¹兵庫県立大学，²岐阜大学）

8 月 26 日（金） 17:00～19:00

ルーム D

F4

海棲哺乳類学への多様なアプローチ

○三谷 曜子¹，森阪 匡通²（¹京都大学，²三重大学）

ルーム E

F5

自動撮影カメラ映像のオープンデータベースの構築に向けて

○中島 啓裕¹，飯島 勇人²，深澤 圭太³，安藤 正規⁴，相澤 宏旭⁵（¹日本大学生物資源科学部，²森林総合研究所，³国立環境研究所，⁴岐阜大学応用生物科学部，⁵広島大学先進理工系科学研究科）

ルーム F

F6

保護管理のための要望書や意見書のあり方を考える

○常田 邦彦¹，石井 信夫²，浅野 玄³（¹自然環境研究センター，²東京女子大学，³岐阜大学応用生物科学部）

8 月 27 日（土） 13:00～15:00

ルーム D

F7

ポスト半減目標～シカと人の未来を考える～

○岸本 康誉¹，八代田 千鶴²，大場 孝裕³（¹株式会社野生動物保護管理事務所，²森林総合研究所関西支所，³静岡県西部農林事務所）

ルーム E

F8

全ゲノム解析を活用した多様な哺乳類研究

○松本 悠貴^{1,2}，木下 豪太³（¹アニコム先進医療研究所株式会社，²麻布大学，³国立遺伝学研究所）

ルーム F

F9

都市における食肉目動物研究 6： 軋轢と共生のバランスとは

○金子 弥生¹，天池 庸介²，渡辺 茂樹³（¹東京農工大学，²北海道大学，³ASWAT）

ルーム G

F10

カモシカの研究の最近 2022

○饗場 木香¹，高田 隼人²，伊藤 哲治³，川本 芳⁴，手塚 夏季⁵（¹自然環境研究センター，²山梨県富士山科学研究所，³酪農学園大学，⁴日本獣医生命科学大学，⁵東京農業大学）

8月27日（土） 15:10～17:10

ルーム D

F11

地方大学で進める哺乳類研究：北国・雪国のフィールドワークへの誘い
○斎藤 昌幸, 江成 広斗（山形大学農学部）

ルーム E

F12

「現場で求められる野生動物管理の人材育成」～人材育成団体が進めるこれまでの成果と課題～
○森光 由樹^{1,2}, 望月 翔太^{3,4}, 伊吾田 宏正^{5,6}, 鈴木 克哉^{7,2}, 宇野 裕之⁸（¹兵庫県立大学, ²ニホンザル管理協会, ³福島大学, ⁴鳥獣管理技術協会, ⁵酪農学園大学, ⁶エゾジカ協会, ⁷里地里山問題研究所, ⁸東京農工大学）

ルーム F

F13

身近な外来哺乳類イエネコの問題をどのように研究するか？
○徳吉 美国¹, 亘 悠哉²（¹東京大学, ²森林総合研究所）

8 月 29 日（月） 11:30～13:30

ルーム D

F14

野生動物とともに拡がるマダニ媒介感染症の脅威とワンヘルスアプローチ

○森嶋 佳織¹，土井 寛大¹，立本 完吾²，山藤 栄一郎³，浅野 玄⁴，亘 悠哉¹

(¹森林総合研究所，²国立感染症研究所，³福島県立医科大学，⁴岐阜大学)

ルーム E

F15

錯誤捕獲問題に学会としてどう取り組んでいくべきか

「実態把握のための情報収集」と「発生防止のための技術開発」について議論を深める

○小坂井 千夏¹，八代田 千鶴²，荒木 良太³，哺乳類保護管理専門委員会・錯誤捕獲 WG (¹農研機構，²森林総合研究所，³(一財)自然環境研究センター)

ルーム F

F16

イルカの資源生態学～個体群の保全管理に向けた生態学と最新知見～

○金治 佑¹，前田 ひかり¹，船坂 徳子²，村瀬 弘人³ (¹水産研究・教育機構，²三重大学，³東京海洋大学)

8 月 29 日（月） 14:00～16:00

ルーム D

F17

自動撮影カメラを用いた「面白い」基礎研究 II

○矢島 豪太（日本大学）

ルーム E

F18

哺乳類の歯の形態進化を考える～最近の知見と伝統的な学説を総合して～

○浅原 正和¹，原野 智広¹，岡部 晋也²，山中 淳之³（¹愛知学院大学教養部生物学教室，²京都大学大学院理学研究科，³鹿児島大学大学院医歯学総合研究科）

ルーム F

F19

日本哺乳類学会哺乳類保護管理専門委員会および作業部会の活動方針

○浅野 玄¹，山崎 晃司²，八代田 千鶴³，池田 透⁴（¹岐阜大学応用生物科学部，²東京農業大学地域環境科学部，³森林機構森林総合研究所，⁴北海道大学文学部）

ワークショップ「知られざる食肉目動物の世界～東欧と日本」

○増田 隆一

(北海道大学 大学院理学研究院 生物科学部門)

私たちは、2010年6月からブルガリアの研究機関との共同研究を始めました。当初は、研究の進め方を試行錯誤し戸惑うこともありました。しかし、共同研究が進むにつれ、バルカン半島南部に位置するブルガリアは、ヨーロッパとアジアの動物相の両面を有していることが明らかとなり、その豊かで多様な自然と哺乳類に魅了されながら研究に取り組んできました。

本集会では、以下の共同研究の参加メンバーが、遺伝的多様性分析、におい物質分析、糞内容物分析、自動撮影カメラなどの様々な研究手法を駆使し、この12年間に得られた多様な食肉目動物に関する研究成果について、ブルガリアを中心に近隣の東欧諸国や日本における研究との比較も交えて紹介します。また、本集会と同名の書籍『知られざる食肉目動物の世界～東欧と日本』が、成果物として本年夏に出版される予定です。

この場をお借りして、共同研究に際して大変お世話になりましたトラキア大学、ブルガリア自然史博物館、東バルカンブタ協会のスタッフに深く御礼申し上げます。

- 1) 増田隆一（北海道大学） ブルガリアの哺乳類、自然、文化
- 2) 金子弥生（東京農工大学） アナグマのにおい物質と生態
- 3) 角田裕志（埼玉県環境科学国際センター） ジャッカルの分布拡大と人間社会
- 4) 西田義憲（北海道大学） イタチ科動物の遺伝的多様性
- 5) 久野真純（東京大学） テンの食性と多様性

ニホンジカ研究と管理のこれまでとこれから

○飯島 勇人¹，鈴木 牧²，宇野 裕之³，梶 光一³

(¹森林総研，²東大院・新領域，³東京農工大)

ニホンジカは、基礎研究の対象種であるとともに、その個体数の大きな変動や生態系における役割から管理についても様々な研究が古くからなされている。2009 年にニホンジカに関する研究を取りまとめた『Sika deer』が出版された。その後、データの長期蓄積、統計モデリングと計算機の発達、計測技術の高度化などによって、新たな発見が多数生まれた。同時に、他のシカ類との比較研究も進み、ニホンジカが持つ特異的な性質が明らかにされつつある。そのような近年の成果が、この度『Sika deer-Life History Plasticity and Management-』として取りまとめられた。本集会は、この新しい Sika book を通して、ニホンジカに関する研究と管理を振り返る。今後、人工林の半数が主伐期を迎える日本は、人口減少社会に突入し、気候変動や人獣共通感染症の侵入リスク拡大など、これまで経験したことがない状況にさらされる。そのような日本社会において、ニホンジカについて今後何を研究すべきかについても議論したい。

GPS テレメトリー研究で見えてきたニホンジカの行動特性（宇野裕之・東京農工大）

ニホンジカの個体群動態の把握とそこから見えてくること（飯島勇人・森林総研）

森林植生とニホンジカの過去と現在（鈴木牧・東大院・新領域）

人口縮小社会におけるニホンジカの管理のあり方（梶光一・東京農工大）

イノシシの豚熱（CSF）感染拡大と生息密度の変動をいかに把握するか？

○横山 真弓¹，鈴木 正嗣²

(¹兵庫県立大学，²岐阜大学)

イノシシにおける豚熱の感染拡大が継続している。2018 年の豚熱発生時には、感染拡大防止に向けて必要となるイノシシの生息密度や行動特性に関する基本的情報が少なく、判断基準がない中で対応を余儀なくされた。今回の CSF 発生はイノシシが各地で高密度化し、分布が急拡大していると考えた中で起こったため、疾病の拡散を防ぐ手立てがほとんどなかったと言っているだろう。また、対策を講じる自治体においては、データ収集と監視体制が欠かせないが、現在でも未発生地域では危機感が十分に共有されておらず、感染状況調査データが不足するケースが散見される。今後日本に侵入する危険性が高いアフリカ豚熱（ASF）対策では、CSF 対応の反省点を明らかにし、事前にイノシシのデータ蓄積と監視体制を構築することが急務である。

本集会では、最低限求められるイノシシの生息密度推定と疾病の簡易的な浸潤状況の把握に関する最新情報を報告する。さらに、必要なデータをいかに収集していくべきか、イノシシの CSF の感染拡大防止及び ASF の初期対応について、押さえておくべきサーベイランス方法について議論する。

1. イノシシの広域的な生息密度推定とデータ収集 高木俊
2. イノシシの生息密度と CSF の拡散状況との関係 栗山武夫
3. 環境試料からの CSF ウイルス検出法開発 鍋島圭
4. CSF サーベイランス強化にむけた有害捕獲個体試料の活用 大沼学

自由集会

F4

海棲哺乳類学への多様なアプローチ

○三谷 曜子¹，森阪 匡通²

(¹京都大学，²三重大大学)

趣旨

鯨類，鰭脚類，海牛類，ラッコにホッキョクグマ．海に暮らす多様な哺乳類たちの行動や生態は陸で暮らす私たちヒトから見ると不思議がいっぱいである．その不思議を多様な角度で見えてみると，どんなことがわかるのか．「普段哺乳類学会では聞けない」学際的な情報交換により，海棲哺乳類という動物たちの被写界深度を上げ，海棲哺乳類学の面白さを深めていきたい．また，講演後には，海棲哺乳類学の未来に向けて，参加者たちとディスカッションする時間を設ける．

プログラム

趣旨説明

田中嘉寛（大阪市立自然史博物館）「鯨類の化石で進化をさぐる」

岡村太路（筑波大学）「形から鯨類の行動を探る」

宮田佳樹（東京大学）「土器脂質分析による海棲哺乳類利用の評価」

工樂樹洋（国立遺伝研・理研 BDR）「DNA 情報の視点から大型海生動物を広く眺めてみて」

ディスカッション

自動撮影カメラ映像のオープンデータベースの構築に向けて

○中島 啓裕¹，飯島 勇人²，深澤 圭太³，安藤 正規⁴，相澤 宏旭⁵

(¹日本大学生物資源科学部，²森林総合研究所，³国立環境研究所，⁴岐阜大学応用生物科学部，

⁵広島大学先進理工系科学研究科)

近年，自動撮影カメラで取得したデータを，オープンデータとして共有する試みがヨーロッパやアメリカで進められている．自動撮影カメラのデータ共有は，膨大なデータに基づいて，深層学習による汎用性の高い種判別モデルを構築・利用可能になるという点で，提供者にとっても大きなメリットがある．しかし，日本をはじめとする東アジアでは，既存のデータベースへの登録や利用がほとんど進んでいない．これは，言語障壁だけでなく，深層学習モデルが東アジアの動物に特化したものではなく種の判別精度が低下する可能性があること，既存のデータベースは静止画ファイルのみを前提としていることなどが背景になっていると思われる．現在，私たちは，日本で取得された映像(主に動画)を集積する新たなプロジェクトの立ち上げを構想している．本集会では，本プロジェクトの現時点での構想を紹介したうえで，今後の進展に向けて，データの提供の可能性や条件について参加者から幅広く意見を募る場としたい．

飯島勇人「カメラデータを含むニホンジカモニタリングデータの活用と共有における課題」

安藤正規・相澤宏旭「野生動物のセンシングに向けた深層学習技術の進展と限界：深層学習と自動撮影映像で何ができるのか？」

深澤圭太「広域・多種カメラトラップ動画データの統合化に向けた挑戦と可能性」

保護管理のための要望書や意見書のあり方を考える

○常田 邦彦¹，石井 信夫²，浅野 玄³

(¹ 自然環境研究センター，² 東京女子大学，³ 岐阜大学応用生物科学部)

要望書や意見書を通じた行政機関等への働きかけは，学会の社会的活動の一つであり，特に保護管理問題に対して取り組まれてきた。これらは，社会的な側面を持つ問題に対して学会の見解を示し，提案等を行うもので，作成に当たっては自然保護団体等の運動体とは異なる学術団体としての立場に立つこと，科学的根拠に基づくこと，論理的であることなどが求められる。また，法制度や行政の仕組みを踏まえ，効果的なやり方を追求することが重要である。

本自由集会では，要望書・意見書にかかわる日本哺乳類学会の近年の取り組みを整理するとともに，新石垣空港（特にコウモリ類の保全）への対応，環境影響評価への対応を行った馬毛島基地（仮称）（哺乳類，特にシカ個体群の保全）の事例を取り上げ，学術団体が提出する要望書・意見書等の在り方を論議する。

- 1 趣旨説明（常田邦彦）
- 2 要望書・意見書のレビューと哺乳類保護管理専門委員会の取り組み（浅野 玄）
- 3 新石垣空港建設問題への対応の経緯と論点（石井信夫）
- 4 馬毛島基地（仮称）建設事業に係る環境影響評価への対応（常田邦彦）
- 5 総合討論

ポスト半減目標～シカと人の未来を考える～

○岸本 康誉¹，八代田 千鶴²，大場 孝裕³

(¹ 株式会社野生動物保護管理事務所，² 森林総合研究所関西支所，³ 静岡県西部農林事務所)

環境省と農林水産省は、急速な個体数増加や分布拡大が起きているニホンジカとイノシシについて、令和5年度までの10年で生息数を半減させるという目標（半減目標）を立て、目標の達成に向けた捕獲事業等を強化してきた。各種捕獲強化の施策が展開されてきている中、目標達成の期限が迫りつつある。このうちニホンジカについては、全国レベルでは個体数がピークアウトし、減少傾向に向かっていると推定され、捕獲強化の成果が出始めているとみられている。地方自治体においても、令和3年度末には多くの都道府県で第二種特定鳥獣管理計画が改訂され、全国目標になぞらえて更なる捕獲の強化が推進されている。

このように国や地方自治体の取組により対策の効果は出てきているものの、目標達成は容易ではない状況にある。これらの現状を踏まえて、ポスト半減目標のあるべき姿について、改めて検討する段階にきていると考えられる。

本集会では、目標設定のあり方や、それを達成するための捕獲や被害対策等の課題を整理して、次の管理ステージに向けた取り組みを議論する。

趣旨説明

1. 目標設定のあり方を考える：岸本康誉（野生動物保護管理事務所）
2. 捕獲体制のあり方を考える：八代田千鶴（森林総合研究所関西支所）
3. 生息地管理、被害管理のあり方を考える：大場孝裕（静岡県西部農林事務所）

コメント：環境省、農林水産省(調整中)

全ゲノム解析を活用した多様な哺乳類研究

○松本 悠貴^{1,2}，木下 豪太³

(¹ アニコム先進医療研究所株式会社, ² 麻布大学, ³ 国立遺伝学研究所)

近年の次世代シーケンサーの発展により、非モデル生物である多くの野生動物や愛玩動物でも全ゲノム解析や遺伝子発現解析などの研究手法が一般的になってきている。本集会では、哺乳類を対象に様々な研究を進められている先生方をお招きし、最近の研究成果を共有していただく。最初に、ゲノム解析に必須の情報である国際基準ゲノム配列の構築について、イエネコの例を紹介する（松本）。次に、博物館に収蔵されていた剥製に由来する試料や考古資料、現生の犬のゲノム情報を活用し、ニホンオオカミと日本犬の関係を紐解く研究について紹介いただく（寺井）。また、ユーラシア全域の野生ハツカネズミの全ゲノム解析結果から明らかにされた集団構造と分散の歴史について紹介いただく（藤原）。さらに、全ゲノム解析から特定したニホンノウサギの毛色多型に関わる遺伝子について、RNA-seq 等による機能解析や、ニッチモデリングによるアリの分布推定の研究を紹介する（木下）。最後の総合討論では、以上の研究例や今後のこの研究分野の課題について議論する（佐藤）。

< 演者 >

- (1) イエネコ 松本 悠貴（アニコム/麻布大）
- (2) ニホンオオカミと日本犬 寺井 洋平（総研大）
- (3) ハツカネズミ 藤原 一道（北大）
- (4) ニホンノウサギ 木下 豪太（遺伝研）
- (5) 総合討論 佐藤 淳（福山大）

都市における食肉目動物研究 6： 軋轢と共生のバランスとは

○金子 弥生¹，天池 庸介²，渡辺 茂樹³

(¹東京農工大学，²北海道大学，³ASWAT)

企画趣旨

食肉目の一部は都市環境にも適応している。過去 5 回の都市の食肉目動物研究自由集会では、在来種の生態の特徴と保護管理、そして外来種の管理について議論を進めてきた。近年、今まで都市においてほとんど姿を見なかった日本固有種であるニホンアナグマが東京都市域で姿を見せ、キツネも都市域の目撃数が増加しつつある。一方で、都市域に野生哺乳類が生息することで、様々な病原体（寄生虫やウイルス、細菌等）による人獣共通感染症のリスク増加が懸念されている。さらに、共存へ向けて見渡すと、食肉目にはシベリアイタチのように、未だに保全上の扱いが曖昧な種が存在している。本集会では、最新の研究事例を紹介しつつ、都市域特有の問題の解決について議論したいと考えている。

講演 1. 東京都心部のアナグマ:微小緑地における生態 2

金子弥生（東京農工大学）

講演 2. 都市シベリアイタチの半世紀

渡辺茂樹（ASWAT）

講演 3. 北海道旭川市に生息する都市ギツネへの集団遺伝解析の適用

天池庸介（北海道大学）

講演 4. 野生動物が保有する病原体が引き起こす人獣共通感染症

播磨勇人（東京農工大学）

コメント.

都市食肉目の生態を市民に知らせるには～シチズンラボ「タヌキ調査」について

久保嶋江実（NHK エンタープライズ）

カモシカの研究の最近 2022

○饗場 木香¹，高田 隼人²，伊藤 哲治³，川本 芳⁴，手塚 夏季⁵

(¹ 自然環境研究センター，² 山梨県富士山科学研究所，³ 酪農学園大学，⁴ 日本獣医生命科学大学，
⁵ 東京農業大学)

カモシカに関する研究は 1970 年代から 2000 年にかけて盛んに行われ、この頃に本種の基礎生態に関する情報の多くが蓄積された。情報の蓄積に伴い、2000 年代以降からはカモシカの研究は低迷期を迎え、カモシカを研究対象とする哺乳類学者は激減した。一方で、2010 年代以降からは日本各地でカモシカの減少やシカ捕獲用のくくり罠による錯誤捕獲、市街地への出没など、カモシカの保護管理をめぐる問題が徐々に浮き彫りになってきた。このような背景を受け、カモシカの研究の再興と保護管理に向けた議論の活性化を目的に、企画者らは 2017 年から連続してカモシカの生態に関する自由集会を開催してきた。その成果か、近年ではカモシカの生態に関する研究が増加しつつある。本集会では、カモシカの最新研究を紹介することにより、研究と保護管理の更なる活性化を目指したい。

話題

饗場木香：趣旨説明

伊藤哲治（酪農学園大学）：「カモシカの個体群構造解析からはじまる保全遺伝学的研究」

川本芳（日本獣医生命科学大学）：「ニホンカモシカの系統地理の特徴：ニホンザルとの比較から」

堀舞子（東邦大学）：「単独性有蹄類におけるメスの群れ化に血縁度は影響するのか？」

手塚夏季（東京農業大学）：「シカの高密度化はカモシカの行動に負の影響を与えるか？」

岸元良輔（信州大学）：「カモシカの眼下腺による臭いつけ行動～なわばりと季節変化の関連性～」

地方大学で進める哺乳類研究：北国・雪国のフィールドワークへの誘い

○斎藤 昌幸, 江成 広斗

(山形大学農学部)

哺乳類を研究するにあたって、フィールドワークは欠かせない。地方大学は、キャンパスが孤立していたり、教員数が限られていたりすることもあり、首都圏にある大学に比べ研究上不利な側面があることは否めないが、一方で広大なフィールドが身近にあるという大きなアドバンテージを持っていることも多い。本集会では北海道と東北という北国・雪国でのフィールドワークに焦点をあて、この地域ならではの研究の楽しさや面白さを、地方大学で研究を進める若手の研究事例を通じて紹介したい。さらに、北国・雪国の地方大学における研究室での研究活動についても、研究室主宰者からいくつか事例を紹介する。いろいろと恵まれていないと思われがち(?)な地方大学でも、楽しく、面白く研究ができることを、参加者（特に学部生・院生）のみなさんにお伝えしたい。

研究事例紹介

1. 北海道：菊池隼人（帯畜大）「XC スキーで迫るエゾモモンガの冬季集団」
2. 青森県：ムラノ千恵（弘前大）「雪の下のハタネズミを追え」
3. 岩手県：大竹崇寛（WMO、元・岩手大）「東北地方のニホンリス-地方大学だから出来たこと-」
4. 山形県：榎本孝晃（岩手連大・山形大配置）「多雪地における中型食肉目動物の食性研究」

研究室紹介

1. 浅利裕伸（帯畜大）
2. 斎藤昌幸（山形大）
3. 江成広斗（山形大）

「現場で求められる野生動物管理の人材育成」

～人材育成団体が進めるこれまでの成果と課題～

○森光 由樹^{1,2}、望月 翔太^{3,4}、伊吾田 宏正^{5,6}、鈴木 克哉^{7,2}、宇野 裕之⁸

(¹兵庫県立大学, ²ニホンザル管理協会, ³福島大学, ⁴鳥獣管理技術協会, ⁵酪農学園大学,
⁶エゾジカ協会, ⁷里地里山問題研究所, ⁸東京農工大学)

近年、大型野生動物による軋轢が増加している。軋轢は農業被害や生活被害、精神被害に加えて市街地への出没、侵略的外来種の定着と増加、感染症によるリスク、地域的な分布の拡大など様々な問題が発生している。一方、少子高齢化する農山村では対策の遅れなど地域による課題が山積している。専門的な立場から、野生鳥獣による問題解決を支援する活動が重要である。しかし、国内の野生動物問題を解決するための人材育成は十分とは言えない状況にある。そこで自由集会では、人材育成研修をすでに実施している関係団体の活動状況を報告するとともに、それぞれ抱える課題を抽出し共有する。各団体が目指している後継者の知識や技術レベル、人材者育成プログラムや認証制度についての成果および課題を整理し、哺乳類学会はじめ、関係学会や教育機関との連携をどう進めるべきか、最新の情報を共有しながら議論を進める予定でいる。

趣旨説明

・森光由樹（兵庫県立大学/ ニホンザル管理協会理事）

①鳥獣管理技術協会が進める人材育成 ～鳥獣管理士制度の現状と課題～

望月翔太（福島大学 食農学類／鳥獣管理技術協会 事務局長）

②エゾシカ協会が進める人材育成～DCC 認証制度の展望～

伊吾田宏正（酪農学園大学/ エゾジカ協会代表理事）

③ニホンザル管理協会が目指す人材育成

～これまでの成果と今後の活動に向けて～

鈴木克哉（特定非営利活動法人 里地里山問題研究所/ ニホンザル管理協会理事）

コメンテーター：大学が進める人材育成

宇野裕之（東京農工大学）

総合討論

身近な外来哺乳類イエネコの問題をどのように研究するか？

○徳吉 美国¹，亘 悠哉²

(¹東京大学，²森林総合研究所)

野放しにされているイエネコは、深刻な生態系被害や感染症伝播を起こしうる最も身近な外来哺乳類の1種である。本学会の参加者でも、野外調査中に走り去るネコや、里中を堂々と歩くネコを見た人は多いだろう。しかしながら、日本国内においては、ネコ問題に取り組む研究者は非常に少ないのが現状である。世間の注目を集めやすいネコ問題を解決に導くには、様々な地域や環境でネコ問題の実態を明らかにし、社会全体の課題として議論するための土台を形成していく必要がある。

そこで本集会では、外来ネコ研究に取り組む研究者・地域が増えることを期待して、ネコ問題にはどのような研究課題があり、どのようなアプローチをとりうるのか、最前線の研究事例を紹介し、それらの成果に基づいて議論する。

1. ネコによる絶滅危惧種の捕食：糞内容物から解き明かす捕食の実態(鈴木魁士・東京大学)
2. 餌付けが森のネコを増やしている？：安定同位体比分析による人為資源依存度の推定(伊澤あさひ・東京大学)
3. ネコの個体群動態・行動範囲・空間分布：カメラトラップと空間明示捕獲再捕獲モデルによる推定(徳吉美国・東京大学)
4. 地域住民はネコ問題をどう考えているのか？：質問紙調査と構造方程式モデリングから探る住民意識(野瀬紹未・北海道大学)
5. コメント（塩野崎和美・奄美自然研）

野生動物とともに拡がるマダニ媒介感染症の脅威とワンヘルスアプローチ

○森嶋 佳織¹, 土井 寛大¹, 立本 完吾², 山藤 栄一郎³, 浅野 玄⁴, 亘 悠哉¹

(¹ 森林総合研究所, ² 国立感染症研究所, ³ 福島県立医科大学, ⁴ 岐阜大学)

野生動物の拡大は、森林生態系の改変や農作物被害など多くの問題を引き起こす。一方、増えすぎた野生動物による感染症の拡大は、これまで見過ごされてきた問題のひとつである。人獣共通感染症は、世界で年間 10 億人以上が感染し、大きな国際問題となっている。温帯地域では、マダニが病原体を媒介する主要な吸血動物である。日本でも様々なマダニ媒介感染症が知られ、その対策が求められている。近年、ヒト、動物、環境を 1 つの系として捉え、総合的に対策を考えるワンヘルスという考え方が注目されている。感染症対策を講じる上で、医学、獣医学、生態学の研究者が連携することが、3 つの系の相互関係の理解を進展させると期待される。

本集会では、野生動物の分布拡大に伴うマダニの分布拡大および病原体伝播について明らかになった知見を報告する。そして、マダニ媒介感染症の拡大を野生動物問題のひとつとして捉え、野生動物管理がどのように感染症リスクの低減に貢献しうるのか、その可能性について議論したい。

ニホンジカの分布とマダニの数の関係 (森嶋佳織・森林総研)

イノシシとアライグマを介したマダニの分布拡大過程 (土井寛大・森林総研)

SFTSV の感染環におけるアライグマの役割 (立本完吾・国感染研)

南房総における日本紅斑熱やベクター、野生動物との関係性 (山藤栄一郎・福島県立医科大)

コメント (浅野玄・岐阜大, 亘悠哉・森林総研)

錯誤捕獲問題に学会としてどう取り組んでいくべきか

「実態把握のための情報収集」と「発生防止のための技術開発」について議論を深める

○小坂井 千夏¹，八代田 千鶴²，荒木 良太³，哺乳類保護管理専門委員会 錯誤捕獲 WG

(¹農研機構，²森林総合研究所，³(一財)自然環境研究センター)

ニホンジカ、イノシシの捕獲推進等に伴い増加する錯誤捕獲問題の解決に向けて、哺乳類学会哺乳類保護管理専門委員会錯誤捕獲ワーキンググループでは、「全国的な実態把握のための情報収集体制の構築」と「発生防止のための技術開発」が重要な取り組むべき課題であり、研究開発が必要と考えている。これらの取り組みを今後学会としてどのように進めていくべきか、各地域での取り組み事例や必要な視点について発表をいただいた上で、参加者と広く意見交換をしたい。

1. はじめに 錯誤捕獲 WG のこれまでの活動紹介

2. 全国的な錯誤捕獲の実態把握のための情報収集体制の構築に向けて～個体群への影響評価等の為のモニタリングに注目して～

2－1. 行政が実施する実態把握のための情報収集事例の紹介（森林総合研究所 大西尚樹）

2－2. 錯誤捕獲が個体群動態に与える影響評価のために必要なデータとその解析（国環研 深澤圭太）

3. 錯誤捕獲防止のための技術開発に必要な視点

3－1. 防止技術の「効果測定」に必要な視点と具体的な検証事例の紹介（長野県 柳沢俊一）

3－2. 錯誤捕獲を発生させないための工夫例の紹介～わなの構造以外に注目して～（岐阜大学 池田敬）

4. 総合討論

コメント 環境省（予定）

イルカの資源生態学～個体群の保全管理に向けた生態学と最新知見～

○金治 佑¹, 前田 ひかり¹, 船坂 徳子², 村瀬 弘人³

(¹水産研究・教育機構, ²三重大学, ³東京海洋大学)

ハンドウイルカなどのマイルカ科鯨類は有史以来我が国沿岸で食用利用され、現在も小規模ながら漁業による捕獲が行われている。こうした捕獲対象種・個体群を安全に管理し、保全していくためには、現在の資源状態を診断し、その結果に基づき対策を講じていくことが肝要である。本集会ではまず資源診断のベースとなる資源動態モデルの構造と将来予測への応用を概説し、それらの改善に必要な各種生態学的情報について議論する。次に漁業現場から長期蓄積された生物標本の分析結果を紹介し、保全管理への応用について議論する。さらに人工・自然標識による移動回遊と個体群分布把握への取り組みを紹介する。また最新の研究事例として、操業記録を用いた来遊変動解析と生化学的手法による年齢査定を試みを紹介する。これらを通して、種・個体群の「よりよい保全管理」の礎となる生態学的情報の利活用について議論する。

演題①：個体数と資源動態 金治佑¹

演題②：生物学的特性値の観察と保全への応用 前田ひかり¹

演題③：標識調査による個体群と分布の把握 船坂 徳子²

事例1：熊野灘南部海域における秋季および冬季の鯨類の来遊状況 橋田佳央梨², 船坂徳子², 前田ひかり¹, 貝良文（太地町漁協）, 吉岡基²

事例2：DNA メチル化レベルに基づく年齢推定の試み 森美月³, 村瀬弘人³, 中村玄³, 上田真久³, 五十嵐晃平³, 前田ひかり¹, 田辺敦、佐原弘益(麻布大)

自動撮影カメラを用いた「面白い」基礎研究Ⅱ

○矢島 豪太

(日本大学)

自動撮影カメラは、非侵襲的かつ効率的にデータを取得できることから、哺乳類の研究に広く利用されている。自動撮影カメラが研究に利用され始めた当初は、静止画しか撮影することができなかった。現在では、高画質な動画の撮影が可能となり、野生下の個体の行動観察がより詳細に行えるようになった。撮影された動画の中には、予想もしていなかったような「驚き」や「発見」と出会えるチャンスが眠っているはずである。しかし、カメラを利用した研究の多くは、個体群パラメータ（個体数やその指標など）の推定を目的としたものである。このような研究では、撮影枚数を重要視するばかりに、動画を観察する機会が失われているのではないと思う。そこで本集会では、自動撮影カメラで撮影された動画をじっくり観察するからこそできた面白い研究を3名の若手研究者に発表してもらい、カメラを利用した哺乳類の基礎研究の発展を促進するためには何が必要かを議論したい。

1. 趣旨説明（矢島豪太・日本大学）

2. ヒグマの嗅覚コミュニケーション：既存の手法と新しい観察システムを組み合わせ（勝島日向子・北海道大学）

3. 死体をめぐる食肉目とハエ類の間の資源競争：動画観察と統計モデリングによる定量化（橋詰茜・日本大学）

4. 野生動物のセミ捕食行動：自動撮影カメラの動画解析を通じて（富田幹次・高知大学）

コメンテーター：三浦慎悟・早稲田大学

哺乳類の歯の形態進化を考える～最近の知見と伝統的な学説を総合して～

○浅原 正和¹, 原野 智広¹, 岡部 晋也², 山中 淳之³

(¹愛知学院大学教養部生物学教室, ²京都大学大学院理学研究科, ³鹿児島大学大学院医歯学総合研究科)

哺乳類に特有な異形歯性と複雑な歯の形態は哺乳類の大きな特徴であり、その繁栄の礎ともいえるものである。このテーマは古くから注目を集めてきており、その進化や形態形成要因については一世紀前の伝統的な学説が比較形態学的手法によって説明を試みてきた一方で、近年はそれらの学説が実験発生学に基づく分子レベルの説明や、数理モデルに基づく発生モデルによって現代的な形で説明へと昇華する例も見られる。こうした様々なアプローチの研究があるなかで、本集会では哺乳類の歯の形態進化に関する知見を過去から最近のものまで振り返り、今後の研究の方向性について議論する場としたい。

講演予定（仮）

1. 浅原正和（愛知学院大学）：趣旨説明（10分）
2. 浅原正和（愛知学院大学）：食肉目における IC モデルと臼歯形態：BMP7 遺伝子と歯の形態との相関（20分）
3. 原野智広（愛知学院大学）：食肉類と鯨類における歯の単純化に關与する萌出位置：場の理論に基づく進化仮説の検討（20分）
4. 岡部晋也（京都大学）：ヒミズの歯式について、モグラ科の歯列異常傾向から得られた洞察（20分）
5. 山中淳之（鹿児島大学）：現生トガリネズミ科の臼歯の発生過程：歯の発生と進化の並行性に関する考察（20分）
7. 総合討論（20分）

日本哺乳類学会哺乳類保護管理専門委員会および作業部会の活動方針

○浅野 玄¹，山崎 晃司²，八代田 千鶴³，池田 透⁴

(¹岐阜大学応用生物科学部，²東京農業大学地域環境科学部，³森林機構森林総合研究所，

⁴北海道大学文学部)

哺乳類保護管理専門委員会は、哺乳類の保護管理に関する諸問題を検討し、適正な保護管理推進のために必要な諸活動を行うことを目的に 1989 年に設立された。多岐にわたる活動に対応するため、現在は委員会内部に 8 つの作業部会（シカ・クマ・外来動物・ニホンザル・海棲哺乳類・イノシシ・カモシカ・レッドデータ）と錯誤捕獲ワーキンググループ (WG) を設置して活動している。委員会、作業部会および WG の活動として、哺乳類の適正な保護管理に関する意見書や要望書の提出、保護管理に関する法律や体制の整備に際しての専門的な意見や助言等を通じ、学術団体である本学会の社会貢献にも寄与してきたと考えている。その一方で、哺乳類を取り巻く環境や社会状況、保護管理に関わる法制度や体制等の変化は急速に進んでいることから、作業部会では、各種の保護管理における現状と課題を整理し、それらを踏まえた今後の長期および短期の活動方針の再検討を行ってきた。そこで本自由集会では、委員会、作業部会および WG から、これまでの活動や今後の活動方針の概要を報告した後、総合討論で会員と意見交換を行う。本自由集会は、哺乳類保護管理専門委員会主催で、委員会活動を会員と共有することを目的として企画した。

1. 趣旨説明と委員会活動概要（企画者）
2. 各種作業部会（8 つ）・WG（1 つ）の活動概要と今後の活動方針（部会・WG 代表者）
3. 総合討論（意見交換）